

新・日本の近代史（第8回）

朝鮮の近代化と日清戦争

(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)

はじめに～

日清戦争(1894～5)の常識

日本が戦った相手＝**清**

戦争の経過…日本の圧倒的優位の内に展開

(陸軍) 成歓の戦い・平壤の戦い・旅順の戦い

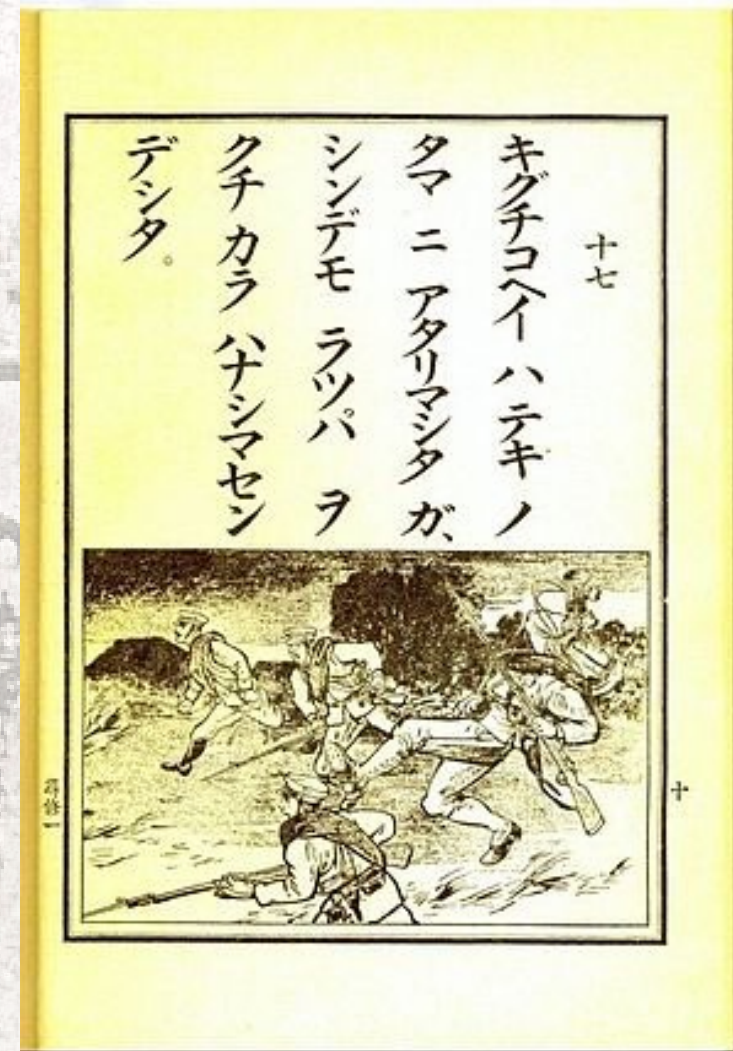
(海軍) 豊島沖海戦・黄海海戦

戦争の結果…**下関条約**⇒三国干渉を受ける

10年後の日露戦争！

戦場は？ 原因は？

⇒**朝鮮**をめぐる対立が原因で、
多くの戦場も**朝鮮国内**



I、朝鮮王国の歴史



朝鮮半島、朝鮮王国（大韓帝国）の歴史



- 1392 李成桂、朝鮮建国
- 朱子学の官学化
- 1446 世宗、訓民正音を公布
- 1575 両班の党争の活発化
- 1592 壬辰倭乱（文禄の役）
- 1597 丁酉倭乱（慶長の役）
- 1637 清に服属
- 1860頃崔濟愚、東学を創始
- 18高宗の即位（大院君の政治）
- 1874 高宗の親政開始
- 1875 江華島事件⇒76日朝修好条規
- 1882 壬午軍乱 1884甲申事変
- 1894 東学農民戦争⇒日清戦争（～95）
- 1897 国号を大韓帝国と変更
- 1904 日露戦争⇒第二次日韓協約（05）
- 1910 韓国併合⇒日本の植民地に

朝鮮王国の歴史(Ⅰ)

◎1392 李成桂が建国

=朝貢・冊封関係にもとづく「属国」

◎朱子学を官学とし、科挙の科目となる

⇒党争(官僚・学派の対立)の活発化

◎16世紀末 豊臣秀吉の侵略

→1607 のちの通信使派遣→善隣関係に

→1609 己酉約条=対馬を窓口とする国交・貿易
釜山に草梁倭館設置

◎17世紀前 清(後金)の侵略

→宗属関係におかれる。

→清が中国全土を支配(明清変態)

◎小中華思想の発生

1392 李成桂、朝鮮建国

→朱子学の官学化

1446 世宗、訓民正音を公布

1575 両班の党争の活発化

1592 豊臣秀吉の侵略(~98)

1607 「朝鮮通信使」を派遣

1627・36 清の侵略、服属

18世紀後半 実学の誕生

1800 正祖死亡・勢道政治へ

19世紀前半 民乱の頻発

1860ごろ 崔濟愚、東学を創始

1863 高宗即位・大院君の政治

「明清変態」と小中華思想の高まり

朝鮮…「明」の属国として発展＝日本の侵略でも援助をうける

⇒官学として朱子学を受容

17世紀前半 女真族(清)の侵略を受け服属

1627丁卯胡乱、1636丙子胡乱

1644清の中国支配へ(明清変態)

明清変態…「夷狄」の女真族が「中華」として
君臨し、朝鮮を属国に

→小中華思想…「清には臣従、朝鮮が
朱子学＝『中華』の正統な後継者」と考える。

＝学ぶ姿勢を失い、形式主義化・独善化し、**党争**を繰り返す。

「朝鮮には『長崎』がなかった」(姜在彦)



18世紀末、実学を重んじ「小中華」の
伝統に一石を投じた国王・正祖を
モデルとした韓国ドラマ「イサン」

大院君の政治と挫折

① 1863 高宗即位・実父・大院君の政治

王権の強化と強硬な鎖国攘夷政策「衛正斥邪」論=朱子学原理主義の立場をとる

- ・勢道政治や両班勢力を排除
- ・王権の拡大をめざす
- ・米・仏勢力の侵入を撃退

→日本を「欧米の走狗」とみなす

② 1873 癸酉政変…高宗親政（閔氏政権）の実現=大院君失脚

改革の停止、日本との交渉の開始



興宣大院君（李昰応）1820～98
高宗の実父・幼い高宗を後見する形で強権的な改革と攘夷政策を実施したが、高宗が成長するなかで王后閔妃らと対立、政権を追われた。

日本との対立と征韓論

①朝鮮がみた明治維新＝日本は「欧米の走狗」となった

「キリスト教徒となった天皇が西洋の助力を得てなしとげた」

日本と修好すればキリスト教、西洋勢力の侵入の危険性がある

②1870年、日本の外交文書（「書契」）の受け取り拒否

形式の一方的変更、「皇」「勅」という「不適切な文字」の使用

→1872、使者との面会も拒否

←③1873年、草梁倭館（朝鮮が対馬藩に貸し与えていた）を
一方的に接收、日本公館とする

④「倭館」前に行為の不当さと西洋化政策を非難した文書を掲示

←⑤日本国内で「**征韓論**」沸騰

Ⅱ、朝鮮の開国と近代化をめぐる混乱



朝鮮の近代化をめぐる二つの課題 ～「反封建」と「民族自立」～

A, 「反封建」の課題…伝統的な社会・政治支配、小中華からの解放

- ①王権制限（内閣制度導入） ②科挙（官吏登用試験）廃止 ③儒教の排除
- ④軍隊警察改革 ⑤地方制度改革 ⑥財政改革と予算制度 ⑦幣制改革
- ⑧近代的裁判制度（縁坐制廃止） ⑨封建的身分制度廃止（賤民の廃止）
- ⑩学校教育 ⑪早婚禁止 ⑫断髪令 ⑬度量衡統一 ⑭太陽暦採用 ⑮鉄道敷設

＜1904～5年の「甲午改革」で課題となった項目の一部＞

B, 「民族の自立・独立」の課題

- ①華夷秩序下の「宗主国・清」⇒しだいに欧米型の支配の方向へ
- ②朝鮮進出の野望を秘める隣国日本⇒新たな関係を強要・優位を得ようとする
- ③欧米列強（とくにロシア）⇒主権国家体制内での開国を要求

⇒ 「朝鮮(韓国)」はこの二つの「近代」の間で呻吟する

江華島事件と日朝修好条規

1874 日本との交渉開始

→文字・服装などで停滞

→日本側＝軍艦を用い示威行為を開始

1875 **江華島事件**発生

日本軍艦の挑発にたいし、朝鮮側が発砲

1876 日本6隻の軍艦とともに来訪、

外交交渉を開始

→**日朝修好条規（江華島条約）**を強要

＝朝鮮側の外交的知識不足に乘じ、不平等条約を強いる。

以後、朝鮮政府、開化政策をすすめる→大院君らの強い反発



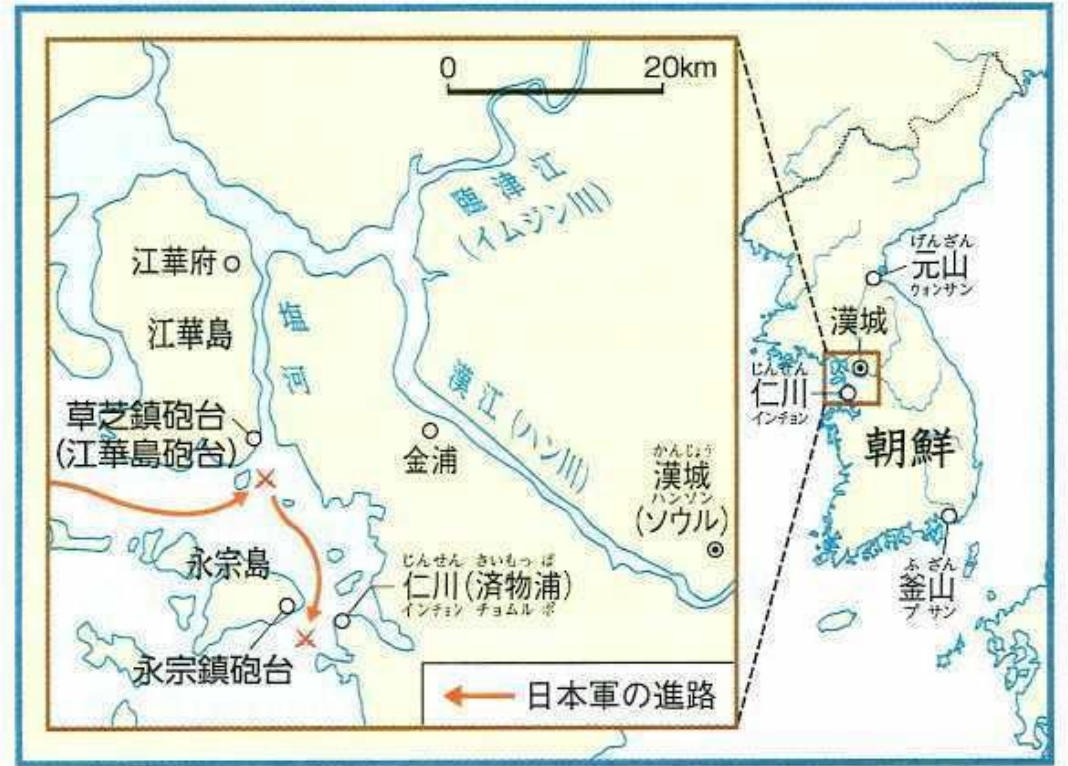
江華島事件（日本大百科全書の説明をもとに記載）

1875（明治8）年9月20日雲揚号（井上良馨艦長）が江華島近海に侵入、江華島砲台の砲撃を受けた。

飲料水を探すのが目的というが、朝鮮側への計画的挑発を図ったものといわれる。

雲揚号にはなんら損害はなかったが、艦砲で応戦、江華島砲台を破壊、南の永宗島に上陸し、民家を焼き、朝鮮人35人を殺害した。

日本政府はこの事件を契機に、翌年
日朝修好条規（江華条約）の締結を
朝鮮政府に迫った。



日朝修好条規＝日米条約よりも「不平等」

- (1) 「朝鮮国は自主の邦にして日本と平等の権を保有せり」
- (2) 外交使節の首都派遣の規定
- (3) 釜山ほか 2 港の開港と自由貿易
- (4) 開港場における居留地の設定
- (5) 領事による居留民の管理
- (6) 領事裁判権
- (7) 釜山の波止場から四キロ以内
および東萊府への内陸旅行・通商権
- (8) 開港場における日本貨幣の流通
- (9) 米穀輸出の承認
- (10) 輸出入税の免除（無関税）



交渉の様子を写した写真

⇒ 高宗は、これまでの日朝関係の延長線上と判断

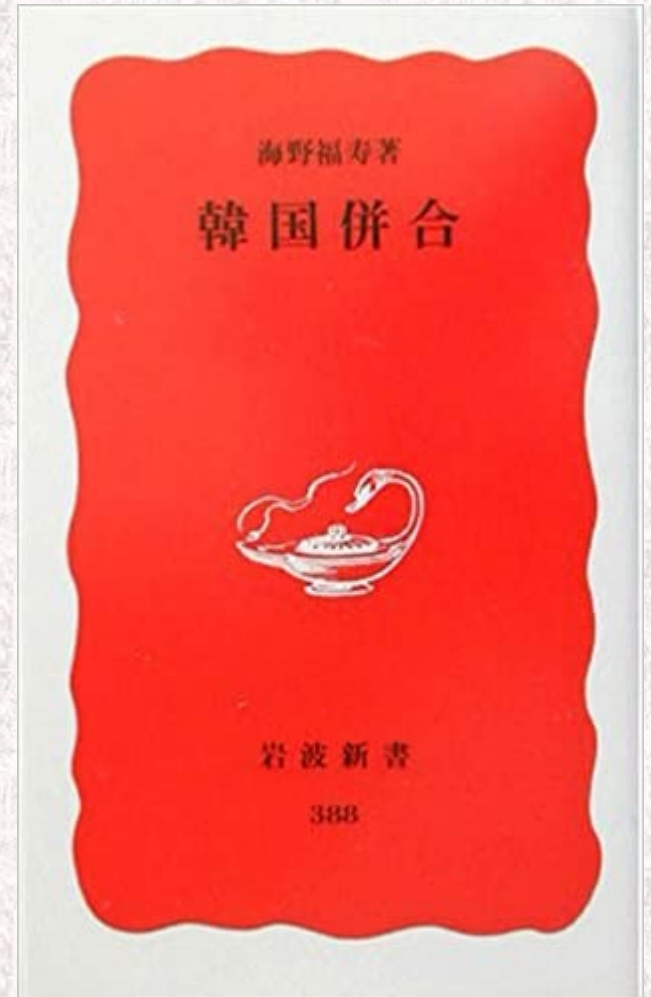
第一条の解釈について（海野福寿）

日本側…朝鮮国は国際法上の主体としての**外交権を持つ独立国と理解**

⇒清朝宗属関係を否定したものと理解
（主権国家体制として理解）

朝鮮側…**従来の宗属関係**～アジア朝貢体制の原理である『自主』と『平等』を表したものにすぎない
（華夷秩序の枠内で理解）

「このズレが日清戦争にいたる日朝清関係のすきまをひろげることになる」



壬午軍乱(1882)の発生

①朝鮮（閔氏）政府、開化政策をすすめる＝日本に接近

⇒大院君など衛正斥邪派との対立激化

②日本の援助下に西洋式軍隊（別技軍）の整備

⇒旧式の軍隊の兵士の不満爆発

⇒武装蜂起、漢城の下層民らも合流

③再起をめざす大院君一派と結合

⇒大院君、閔氏一族から政権を奪取

⇒一部は日本公使館を襲撃

④日本公使ら、いったん日本に逃亡



蜂起したソウルの兵士・民衆

壬午軍乱(2) 清の影響力拡大

⑤日本・清、両軍、朝鮮へ出兵

⑥清…大院君政府を倒し、閔氏政権を復活

以後、清軍の駐屯⇒朝鮮への影響力を行使

※清の政策変更…不干渉政策から干渉政策に

華夷体制下の属国から、欧米流の属国に

⇒日本への補償（済物浦条約）・朝鮮の開国を促進

⑦日本…失地回復をはかる

清との軍事力の差を実感⇒軍備拡張の開始

⇒陸：専守防衛型から外征対応型に

海：艦隊増強

軍事費の推移

年度		歳出総額	総軍事費	軍事/歳出	対GNP比
		千円	千円	%	%
1875	明治8	69,203	9,785	14.14%	
1876	明治9	59,308	10,329	17.42%	
1877	明治10	48,428	9,203	19.00%	
1878	明治11	60,941	9,249	15.18%	
1879	明治12	60,317	11,257	18.66%	
1880	明治13	63,140	12,009	19.02%	
1881	明治14	71,460	11,852	16.59%	
1882	明治15	73,480	12,410	16.89%	
1883	明治16	83,106	19,194	23.10%	
1884	明治17	76,663	17,487	22.81%	
1885	明治18	61,115	15,512	25.38%	1.92%
1886	明治19	83,223	20,523	24.66%	2.57%
1887	明治20	79,453	22,452	28.26%	2.74%
1888	明治21	81,504	22,786	27.96%	2.63%
1889	明治22	88,756	23,584	26.57%	2.47%
1890	明治23	73,082	25,692	35.16%	2.43%
1891	明治24	83,555	23,682	28.34%	2.08%
1892	明治25	76,734	23,768	30.97%	2.11%
1893	明治26	84,581	22,832	26.99%	1.91%
1894	明治27	185,299	128,427	69.31%	9.60%
1895	明治28	178,631	117,047	65.52%	7.54%

甲申事変(1884)＝独立派の敗北

①朝鮮政府・開化派内部の分裂

1) 事大党…清の属国＝「小国」として近代化をめざす。

2) 独立党…「属国」を拒否。近代主権国家をめざす。

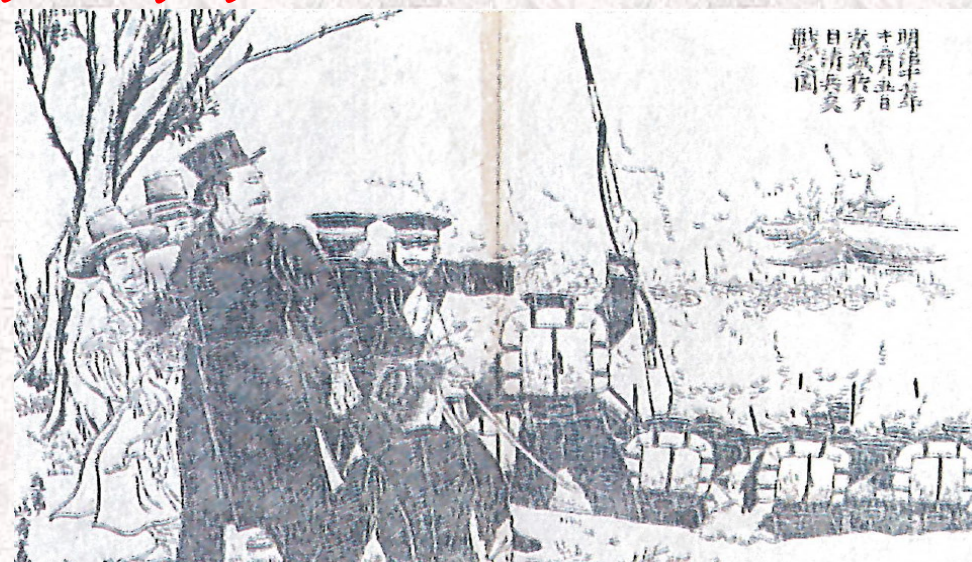
②甲申事変…独立党の金玉均らによるクーデタ

日本公使館・軍の援助をえる

⇒要人を殺害、独立党政権樹立

③閔妃らの要請を受け清軍が鎮圧

⇒金玉均らは日本に



清軍が出動すると日本軍はすぐ撤退。
公使は仁川から帰国、金玉均らの同行を拒もうとした。

Ⅲ、日清戦争前夜



朝鮮から日本へ運び出される大量の穀物



東学農民運動の指導者・全捧準

甲申事変②

天津条約と清の影響力拡大

- ①日本、軍隊を派遣、朝鮮に補償を要求
⇒漢城条約を締結
 - ②天津条約 ⇒以後、平穏な時代に
 - 1) 日清両軍の朝鮮撤退
 - 2) 出兵に際しての相互通告
 - ③清の朝鮮への介入（属国化）の進展
 - 1) 宗主国としての立場を、諸国にも強調
 - 2) 「中朝商民水陸貿易章程」締結
中国の特殊な権益を規定、輸出拡大⇒日本および欧米列強の反発
- ⇒高宗、ロシアへ属国化を依頼



袁世凱(1859~1916)
宗主国・清の代表として権力を行使した。のち中華民国の臨時総統

清による「属国」化をめぐる国際情勢

清…**宗主国としての特殊な権利を主張**

⇒日本・ロシアなどの影響力拡大を嫌う。

朝鮮…**高宗、ロシアの援助＝属国化を要望**

→政府、高宗の工作を通報

⇒清（袁世凱）のしめつけ・大院君帰国

日本…**朝鮮への清・ロシアの影響力拡大を嫌う**

⇒朝鮮の「独立」⇒「改革」を要望。

ロシア…朝鮮進出には慎重。海軍は前向き

最大の敵・英の動きに神経質

イギリス…ロシアの基地を獲得を恐れる

⇒1885、**巨文島事件**をおこす



メレンドルフ
(1847～1901)

ドイツ人。李鴻章の推薦で朝鮮の外交・財務顧問となる。のちロシア接近をすすめる。



巨文島事件...1885年イギリス艦隊が朝鮮海峡にある巨文島を占領した事件。ロシアと朝鮮政府との接近を嫌った。87年、清の仲介で撤退。

朝鮮国内での矛盾の高まり

日本による経済進出

綿布（当初は欧米製）を売って穀物を買占める

→経済構造の破壊すすむ

→防穀令（=輸出禁止令）→補償要求

朝鮮政府の財政難=売位売官で補填

→地方官・要した費用を転嫁

→本来の賑恤機能の破綻

=「仁政」に反する行いとされる



民衆の疲弊と政府不信

⇒国王への期待

米の対日輸出力 (趙12P96より)

年	輸出(円)	年	輸出(円)
1885	27,201	1896	2,852,050
1886	10,523	1897	6,009,050
1887	128,948	1898	2,704,887
1888	21,472	1899	1,689,909
1889	54,394	1900	4,694,167
1890	2,540,652	1901	6,009,541
1891	2,225,043	1902	3,961,312
1892	1,348,796	1903	4,781,218
1893	470,208	1904	1,578,629
1894	810,475	1905	1,268,502
1895	888,022		



朝鮮から輸出される大量の穀物

「東学」の成立と発展

1860年没落両班の崔濟愚が民間信仰と儒・仏・仙をもとに創始した宗教。

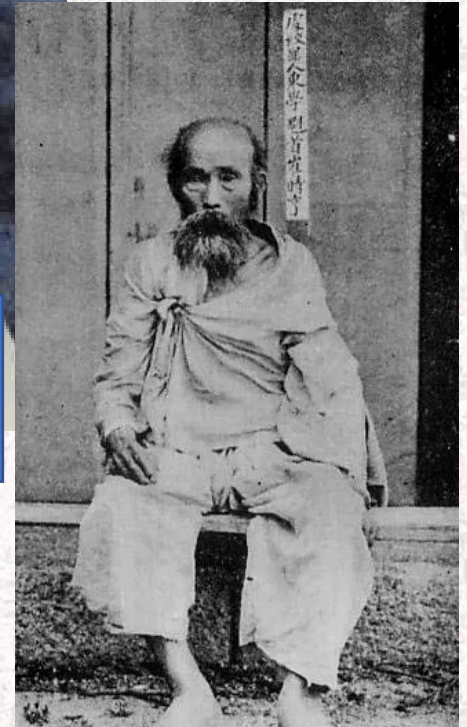
欧米列強の武力の基礎にある「西学＝天主教」に対抗し「輔国安民」を説く。「人すなわち天」とする人間の平等思想をもち、修行により「済病長生」が可能になり、さらには世直しの「後天開闢」により身分的差異のない地上天国が実現する、と説いた。

第二代教主崔時亨は「修養」を重視、秩序への従属をもとめる傾向を強める。

また余力のある者が貧しい者を助けるコミュニティという役割を持ちつつ拡大した。



崔濟愚(1824～64)
東学の創始者・大院君
政府に処刑された



崔時亨
(1827～1898)
東学の二代目教主

東学農民戦争（1894）の発生

- ①1894 全琫準ら、悪徳地方官に反対し蜂起
⇒全羅道や忠清道などに拡大（東学農民戦争）
→5月末、全州を占領

農民軍の要求

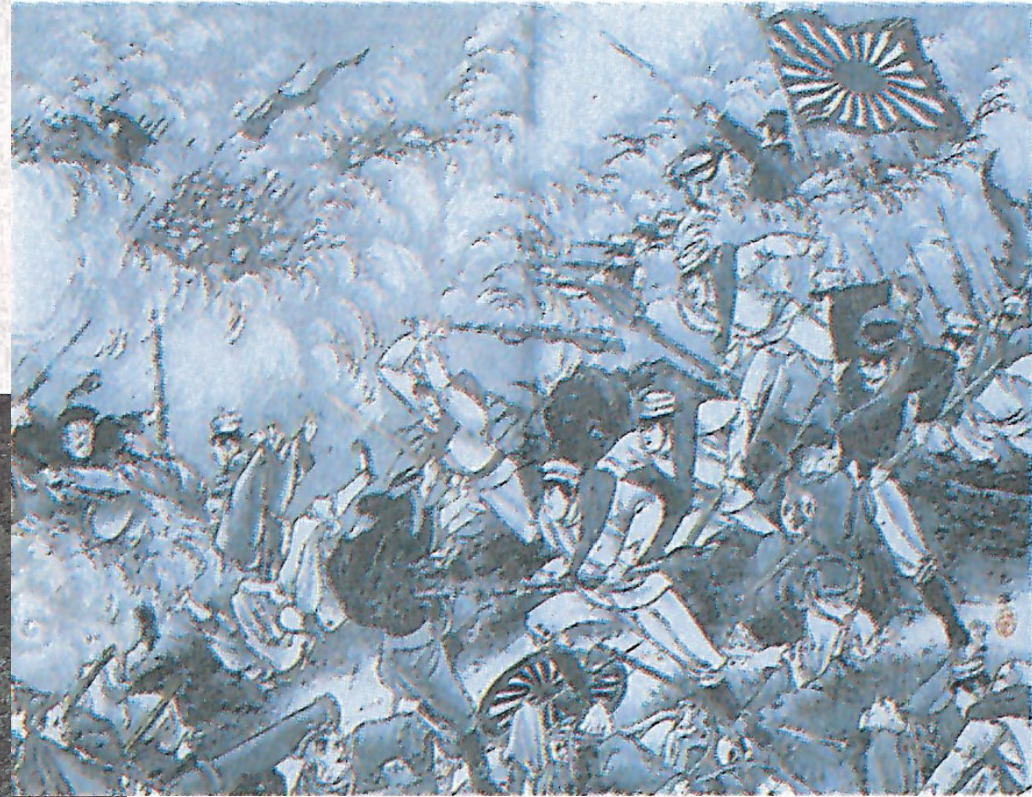
- 1) 税をおさぼる強欲な悪い役人を辞めさせる
- 2) 税のあり方の変更と不当な徴税撤廃
- 3) 外国商人の不当な活動の禁止

- ②農民軍と政府側で**全州和約**成立
農民戦争の解決・農民コミュニーの成立へ
←日・清両軍の出兵への対応



東学農民戦争関係地図

IV、日清戦争の開始



日清両軍の出兵

①東学農民戦争の拡大＝朝鮮側での鎮圧困難に

②朝鮮政府、清に派兵を依頼

（首謀者は？袁世凱、閔泳駿、高宗）

→清、出兵へ＝日本情勢を読み誤る

→天津条約にしたがって日本に通告

③情報を事前につかんだ日本も派兵準備

→通告と同時に大軍を派兵

④全州和約の成立＝農民戦争解決

→朝鮮政府、両軍への撤兵要請

⑤日本撤兵を拒否（同時撤兵も）



仁川に上陸する日本軍

七月二三日戦争と日清戦争

- ①日本、東学農民戦争の鎮圧への協力を口実到大軍を派遣
⇒全州和約後も増兵
- ②撤兵を拒み、開戦の口実を探る
「自主独立実現」「朝鮮の内政改革」などを主張
- ③朝鮮側…申し入れを拒否、撤兵を要求
- ④7月23日…日本軍、朝鮮王宮を襲撃
 - ・国王夫妻を確保⇒大院君を摂政に
 - ・金弘集開化派親日政権成立⇒甲午改革へ
- ⑤日本、朝鮮政府の要請を口実に戦闘を開始
⇒清に宣戦（日清戦争の開始）



日清戦争開戦

①7月16日 **日英通商航海条約締結（条約改正）**

⇒イギリスとの友好関係の実現

②7月23日 朝鮮王宮占拠（**7月23日戦争**）

= 「親日」政権樹立

③7月25日 **豊島沖海戦**・高陞号事件

清国軍を大量に積んだイギリス船を沈める

⇒国際問題化？

④日本、朝鮮政府の要請を根拠に清軍を攻撃

7月29日 **成歓の戦い**

牙山に駐屯していた清軍を攻撃⇒勝利

⑤**8月1日清に宣戦布告**



日本側の事情 帝国議会の行き詰まり

①条約改正交渉の進展

- 議会（旧改進黨＋体外硬）、反対決議を乱発
- 第二次伊藤内閣、対抗し議会を解散

②清との緊張＝対外緊張による事態打開を図る

③陸奥宗光外相・川上操六参謀次長

⇒開戦を想定して、大軍を派兵

※手ぶらで帰ってくれば政府は崩壊の危機に

陸奥外相・大鳥公使…強引に開戦に持ち込む

④7月16日 日英通商航海条約締結（条約改正）

⑤7月25日 日清間の戦闘開始



陸奥宗光（1844～97）
日清戦争時の外相。条約改正の実現と朝鮮での事態打開、国内対立をそれるため、陸軍参謀次長川上操六と謀り、大規模な出兵をすすめた。

戦局の推移

<陸軍>

- ①7月29日 **成歓の戦い** = 牙山の清軍を破る
- ②8月1日 **清に宣戦布告**
- ③9月16日 **平壤の戦い** = 清の大軍撤退
⇒以後、**戦場は「満州」(東北部)**へ
- ④11月 大連・旅順占領 (旅順虐殺事件発生)
- ⑤95年2月威海衛占領

<海軍>

- 7月25日 **豊島沖海戦**
- 9月14日 **黄海海戦** = **日本が制海権を握る**
- 95年2月威海衛包囲作戦 = **清国海軍を壊滅させる**



旅順虐殺事件

1894年11月旅順攻略戦で発生した虐殺事件。

清軍の捕虜虐殺に激怒した日本軍が、清の捕虜、婦女子・老人を含む一般住民を大量に虐殺した。

外国メディアが報道し問題視され、非難が殺到した。

軍・政府はいったん事実を認めたがのちごまかしに終始した。

この事件による処罰は行われなかった。



←旅順虐殺事件を報じた外国紙の記事

→旅順の慰霊碑
事件の発生した日時が
刻まれている



日清戦争下の朝鮮

1, 親日開化派の**金弘集内閣**成立

⇒日本の軍事行動へ協力

⇒本格的な改革に着手（**甲午改革**）

2, 食料や人夫の徴発に反対

⇒農民や政府の高官・地方官による

反日運動の発生

3, 第二次東学農民戦争

反日蜂起（第二次東学農民戦争）に

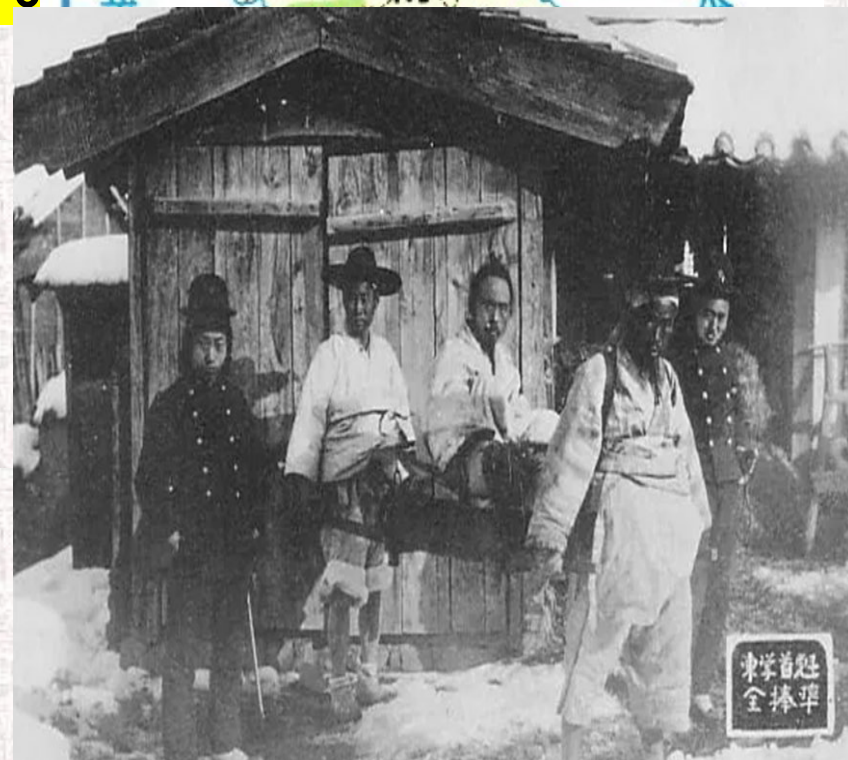
→日本軍はこの鎮圧に



金弘集(1842～1896)
日清戦争下、日本と協力し、
朝鮮初の本格的な近代化政
策を推し進めた。しかし王
や民衆の反発を買い、殺害
された。

第二次東学農民戦争

- ①東学農民軍は日本軍の協力を拒否
⇒「忠君愛国」の義兵として再蜂起。
- ②規模の拡大＝朝鮮の半分程度にまで広がる。
「偽東学党」も出現
- ③参加者…のべ13万4750人(原田敬一)
数十万人(趙景達)
- ④日本軍・政府軍・両班義勇軍による鎮圧
参謀次長の川上操六は「悉く殺戮すべし」
との命令
- ⑤少なくとも5万人ほどの農民が死亡した



捕らえられた農民軍指導者全琫準

朝鮮における「改革」（甲午改革）の進展

(1) **開化派による近代化（※戦後分も含む）⇒これまでの課題解消の面**

- ①王権制限 ②内閣制度導入 ③科挙の廃止 ④儒教の排除
- ⑤軍隊警察改革 ⑥地方制度改革 ⑦財政の一本化と予算制度
- ⑧幣制改革 ⑨度量衡統一 ⑩近代的裁判制度 ⑪縁坐制の廃止
- ⑫学校教育制度 ⑬留学生派遣 ⑭封建的身分制度廃止
- ⑮賤民制廃止・⑯太陽暦採用 ⑰早婚禁止 ⑱断髪令

(2) **日本軍協力と日本の意向を受けた改革⇒日本の進出を加速する面**

- ①内政改革施行 ②鉄道の早期敷設 ③軍用電信の条約化
- ④新たな貿易港開港 ⑤景福宮襲撃（7月23日戦争）を不問に
- ⑥「自主独立」の合同会議開催 ⑦王宮警備の日本軍の撤退

※「日兵の進退および其糧食準備の為、及ぶだけ便宜をあたうべし」

「朝鮮」での近代化の模索と、日・清・ロシア

(1) 朝鮮にとって近代化の二つの課題

A, 「反封建」…伝統的な社会と政治支配・「小中華」思想からの解放

B, 民族の自立・独立…「宗主国・清」・日本・欧米列強との関係調整

(2) 朝鮮諸勢力の苦闘 = 二つの課題へ、それぞれの対応

① 独立党(金玉均ら)…清の影響力排除。王朝の近代化(⇒Aの実現?)

② 甲午改革(金弘集ら)…清のち日本の力を背景に、日本の力でAを本格化

③ 東学農民戦争…民衆の力での下からのAの実現。国王幻想⇒Bも視野に

④ 「衛正斥邪」論…伝統的価値の遵守=不正を攻撃、Bを重視、Aと日本を敵視

⑤ 高宗夫妻…国王独裁実現下での上からの改革・ロシアなどの援助に期待

(3) 日本…自国の影響力拡大=清・ロシアの影響力排除、をめざす

つごうのよい「独立国」朝鮮の改革を希望

⇒ しだいに朝鮮の「保護国」化を志向する

V, 日清戦争の終了



「勝利の傲慢」外国紙に掲載された報道画



下関講和会議



台湾平定戦で戦病死した北白川宮の銅像。台湾大神宮の祭神とされる。

原田敬一「日本国民にとっての日清戦争」

- 1, 国民が海外出兵を知ったのはいつか
- 2, まず**上流の突風**が吹いた＝富裕層による高額献納の記事
- 3, **国粹主義の旋風**が続いた＝義勇兵計画が動き始める
- 4, 次に**知識人と上流の追い風**が吹いた
＝岩崎・福沢ら義捐金呼びかけ⇒公債応募運動が展開
- 5, **命を削って志願の嵐が～窮民献金と軍夫**
＝「細民・労働者たちの小口献金」の記事、軍夫応募
むすびにかえて
「日清戦争によって、上流の軍事公債応募運動、中下層
の義勇軍運動－軍夫志願運動、全体が合流した献金献納
運動、のそれぞれが始まる。**融合して、挙国一致が常態
化していった。」**

(原田敬一『日清戦争論』第一章)



日清戦争とジャーナリズム

(「朝日新聞社史」の見出しから)

第7章 日清戦争で部数躍進

1, 緊迫の朝鮮情勢

厳重なる新聞統制 はじめての写真銅板付録

2, 日清ついに開戦

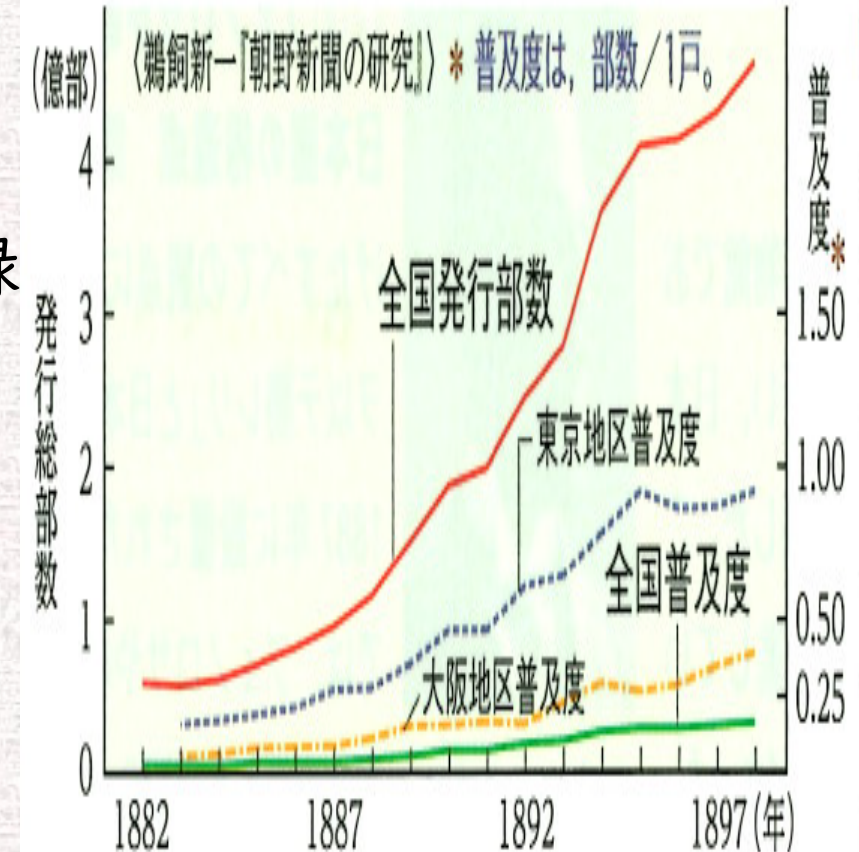
3, 戦局の展開と特派員の労苦

苦難の従軍行、報道統制も悩み、
西村時輔の死、 通信連絡に苦心

4, 下関で講和会議

5, 三国干渉をのむ

大朝・発行停止さる、大朝・号外戦で制覇



新聞の発行部数と普及度

日本軍の優勢～日本の方針が変わる

①対朝鮮方針の閣議決定

陸奥外相、「完全独立・保護国化・日清の共同管理・永世中立国化」の4案を提示

⇒閣議は乙案「保護国化」を選択

「名義上独立国と公認するも、帝国より間接に直接に、永遠もしくは長時間、その独立を保翼扶持し、他のあなどりをふせぐるの労をとる」（陸奥が示した乙案）

②これに適した朝鮮の改革を促進＝井上馨を派遣

朝鮮の国内改革（日本型「立憲君主国」＝国王の権限削減、日本人官吏の採用）を促進する

⇒国王夫妻の反発

③領土獲得に向けた軍事作戦の開始

＝満州（遼東半島）・台湾など



井上馨（1836～1915）
長州藩出身・元老の一員で伊藤の盟友。ながく政府中枢に参画、外務大臣などを歴任。

参加陸軍した陸軍の兵員

日本陸軍

七個師団 24万 616人(海外勤務17万4017人)

文官・雇員 6495人(海外勤務 4275人)

軍夫(臨時雇用の軍属) 15万3974人

※軍人軍属の合計 約40万人(海外勤務30万人以上)

参考: 日露戦争124万3174人(戦地勤務99万9689人)

清国陸軍

勇軍(郷勇)+練軍(八旗・緑營の選抜軍)35万人

新規の募兵 63万人

※合計 98万人



物資の輸送は、こうした軍夫と呼ばれた軍属によって担われた

海軍の比較

日本：軍艦28隻水雷艇24隻 総トン数5万9000トン

新鋭艦が中心・統一的な司令部のもとに行動

清：軍艦82隻水雷艇25隻 総トン数8万5000トン

世界最大級の大型艦 定遠・鎮遠、

他は旧型船が多い

指揮系統…北洋・南洋・福建・広東の四水師

に分かれそれぞれの大員・総督が指揮

参加したのは北洋＋広東の一部のみ



豊島沖の海戦

なぜ日本が勝ったのか

～「海軍装備などは明らかに清がまさっていた!」～

「清」不利を最も熟知していたのは李鴻章だった?

①清の富国強兵…「中体西用論」「洋務運動」

体制には手をつけないまま主に軍備や科学技術を導入

→軍備では勝ってもそれを生かすシステムが導入できない。

指揮官・兵士の間の装備と意識・能力のアンバランスさ。

②日本…国民国家の形成＝「自分の国」意識

新興国家…実力主義や指揮のシステム化がすすむ

指揮官・兵士の当事者意識・教育水準などバランスの良さ

③挙国体制の形成の強弱

・光緒帝と側近…装備の優秀さに幻惑され、質を問わない

・日本…議会などの戦争協力＝「初期議会の終焉」



李鴻章(1821～1901)

中国の政治家・軍人
太平天国の乱鎮圧をきっかけに台頭。北洋軍を建設、
清末期の政治・改革を主導
した。下関条約を調印

下関条約～東アジアを変えた条約('95,4)

1) 全権：伊藤博文・陸奥宗光（日本）vs 李鴻章（清）

⇒ **伊藤ら、領土割譲と賠償金獲得に強く固執**
「戦争の結果たることを諒知せられたし」

＜締結内容＞

- ① 朝鮮の独立を承認
- ② 台湾と澎湖諸島・遼東半島を譲渡
- ③ 2億両の賠償金
- ④ 4港の開港
- ⑤ 日清修好条規破棄⇒不平等条約の締結

2) 伊藤らの強硬論の背景

- ① **陸軍（⇒遼東半島）と海軍（⇒台湾）の対立**
- ② **戦勝に乗じた強硬な国内世論⇒国民国家の危険な側面**



講和会議の舞台となった下関・
春帆楼

李鴻章の正論

～日本は、一つの石つぶてで二羽の鳥を捕ろうとしている。

李の主張：日本の戦争目的の「朝鮮独立」のはず。

- ①日本は「朝鮮独立」を確約すべき
- ②清の領土「遼東半島」の割譲は筋違い
⇒不当性をロシアに訴える＝三国干渉に
- ③占領もしていない台湾割譲も筋違い
- ④戦費1.5億円に対し3億円の要求に根拠がない
- ⑤最恵国待遇は双方に適用されるべき



調印時：「(伊藤)閣下はこれほど『嚴酷執拗』な人とは思わなかった」

⇒清の挫折感＝近代日本への強い警戒心・不信感として残る。

ロシアに接近、露清密約(＝東清鉄道の権益譲渡)に

日清戦争・三国干渉のもたらしたものの

①日本…交渉経過をイギリスにのみ連絡。他国の反発

②**三国干渉**「下関条約に強く抗議」

ロシア・ドイツ・フランス…遼東半島返還を要求し、
軍艦を派遣

③日本側、遼東半島返還に応じる

<下関条約・三国干渉の歴史的意義>

①国内での**ロシア脅威論**の高まり

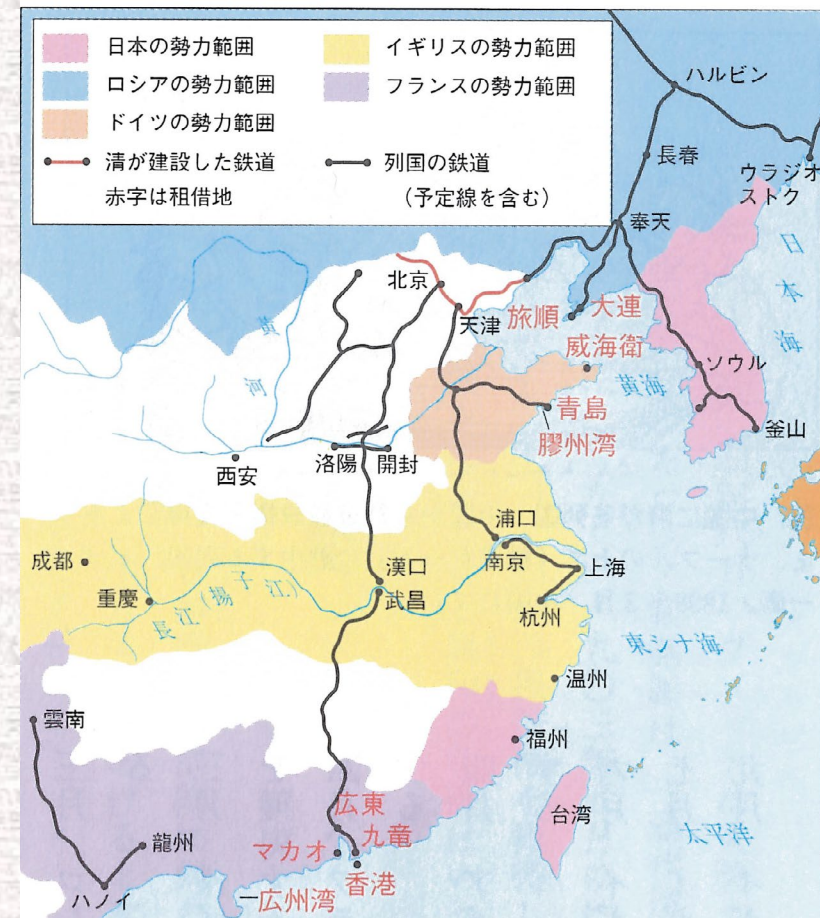
⇒軍拡容認・ナショナリズムの高まり(「臥薪嘗胆」)

②東アジア情勢の激変=**中国の債務国家化**

⇒「**中国の瓜分**」の進行

③**朝鮮での反日本勢力の復活**

⇒親日勢力の退潮・「改革」の停滞



東アジアでの半植民地化の進展

もうひとつの日清戦争～台湾での戦争

台湾…本土からの漢族が開拓した「フロンティア」

1885年、台湾省に(←台湾出兵の影響)

下関条約=日本への割譲が決定

台湾住民=「台湾民主国」を名乗り抵抗運動を開始



激しい戦闘(95/5～/10)さらに数年間ゲリラ戦つづく

戦闘で14000人死亡、その後12000人が「死刑」などに

日本軍=戦闘と疫病の蔓延で死者相次ぐ

平定戦での死傷者5320人、その後もあいつぐ

(北白川宮も病死。戦死説も)



日清戦争の日本軍の犠牲者

日清戦争の日本側の死者

①公式には戦死1415人 戦病死11894人

- ・戦病死者の圧倒的な数
(脚気・赤痢・コレラ・マラリア)

- ・この数は正式な兵士のみ、

②軍夫の死者は不明(7000人以上?)

⇒不十分な補給体制を大量の軍夫で補填。

動員者は約154,000人との推計

臨時軍事費(決算) (円)			戦死者 (人)	
収入	公債金	1億1681万	戦死	1415
	特別資金*	7896万	病死	1万1894
	その他	2946万	計	1万3309
	計	2億2523万	〈『近現代日本経済史要覧』ほか〉	
支出	陸軍	1億6452万		
	海軍	3596万		
	計	2億48万		

*のちに賠償金により繰り入れ返済。

③清軍の戦闘死 (戦病死を含まない) 約3万人?

おわりに～日清戦争(1894～5)とは

日本が戦った相手＝**清**（狭義の「日清戦争」）

朝鮮政府(7月23日戦争)、朝鮮民衆(東学農民戦争)

台湾民衆

戦場…**朝鮮・満州南部**(+山東半島、黄海)、**台湾**

原因…**朝鮮支配をめぐる日清の争い**

条約改正をめぐる国内（とくに議会内）の対立

戦争の経過…日本の圧倒的優位の内に展開

→**対民衆戦(「東学」・台湾)、旅順虐殺事件**

大量の病没者の発生

戦争の講和…**下関条約**

朝鮮における日本勢力の退潮と蛮行

①三国干渉＝「日本がロシアに屈服した」ことを示す。

- ・高宗・閔妃、日本からの離脱・ロシア接近を進める
⇒日本側、失地回復をはかる

②閔妃殺害事件

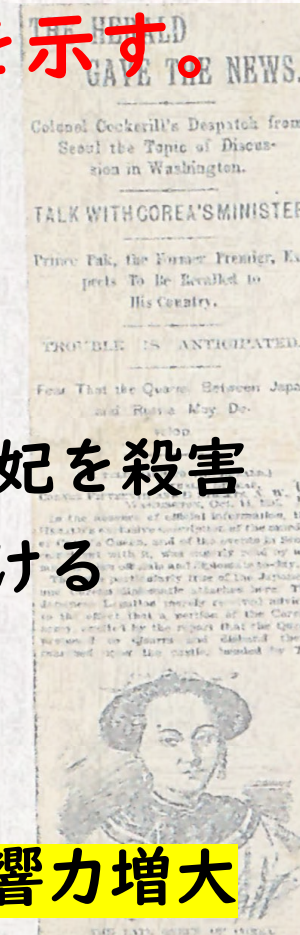
- ・公使・三浦梧楼、反日派の中心と見なした王后・閔妃を殺害
⇒国際的な非難、さらに朝鮮国民の強い反発をうける

③露館播遷（1896/2～97/2）

- ①高宗一家がロシア公使館へ逃げ込む。

- ②親日派政権の崩壊と親露派の政権成立＝ロシアの影響力増大

⇒日清戦争の目的は結果的に挫折
⇒朝鮮におけるロシアとの対立激化



37 閔妃殺害を報ずる『ニューヨーク・ヘラルド』 1895年10月15日。

日清戦争のもつ意味 「上からの国民国家」建設の完成

「国民（＝「日本人」）」の創出

「日本人」とは

同じ言葉（共通語）を話し

同じ物語（神話や「歴史」・将来像・理想像・正しい生き方）を共有し、

同じ民族であるという「感覚」を共有し、

「命を捧げておかまわぬ」という感情をもつ。

こうした日本人が明治に「創られ」、
日露戦争に兵士として参加した！

- ・ 学校教育の定着
⇒ 共通語の普及
- ・ 憲法制定と帝国議会開設
⇒ 対立から挙国一致実現へ
- ・ 憲法・教育勅語
⇒ 「万世一系」の神話定着
- ・ 条約改正実現
⇒ 国民的課題の一応の解決
- ・ 日清戦争とその勝利
⇒ 命を投げ出す兵士
⇒ 国民一丸となつての勝利
⇒ 植民地・台湾の獲得
- ・ 新たな課題、ロシアとの戦いへ

日清戦争の持つ意味

①「外交上の失敗」としての下関条約

- 列強の清への帝国主義政策を惹起
- 「三国干渉」=ロシアとの対立激化

②台湾植民地化=帝国主義国家・日本の誕生 朝鮮への抑圧、さらに失策を拡大へ

- 閔妃殺害事件・露館播遷・大韓帝国

③日本のあり方の変化

国民国家が一応完成する。

議会・政党の体制内化=立憲政友会結成

④「五十年戦争」の開始

- 絶え間ない対外戦争の時代に

「五十年戦争」

1894～日清戦争

1895 台湾掃討戦

1890 義和団戦争

1904～日露戦争

1914～第一次世界大戦

1918～シベリア出兵

1927～山東出兵

1931～満州事変

1937～日中戦争

1941～

アジア太平洋戦争

1945 敗戦